
Yes!モンスターハンター!!

□リング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Yes!モンスターハンター!!

【Nコード】

N0604C

【作者名】

ロリング

【あらすじ】

モンスターハンターのFFです。新米ハンターレイドと謎の仲間達のお話で、王国やハンター組合も絡んでくる（予定）です。大分オリジナル気味なのですがもしよかったですら読んで下さい！

エピソード

俺の前方　わずか数メートル先で雪が飛び散り、鈍く光る。
ヤバイ。そう感じると同時に俺は踏み固められた足元を蹴った。

そして次の瞬間、そこに凶器　蒼い爪が降ってきて、固かったはずの雪が深く抉れる。

「つぶなかつ！！」

単語一つ言い切る暇もなく、再び爪が俺に踊りかかってくる。

だがしかし、今この状況で踊らされているのは間違いなく自分だ。

今までは、ここまでヤバイ事はなかった。こんな危機に迫るなんて少し、甘かったのかもしれない　今回、初めてボスモンスターとも言えるような大きな敵と戦うことになったのだ。

ドスギアノス　強靱な二本足、薄黄色い嘴に真つ白に蒼い縞模様の入った体躯、トサカとおそろいのくすんだ青色の鋭い爪をもつ鳥竜種で、爪と歯は鋭く、下手な金属など貫通させてしまう。

すなわち。

今、自分は全裸同然、一発ノックアウトの確立が高いわけであり避けてばかりの俺は、今回まだ一度も俺の相棒である大剣『ボーンスラッシャー』を抜いてない。

俺　避けてばかりのヘナチョコを嘲笑うかのようにヤツは一声甲高くないた。

嘴には爪同様に鋭い牙がイルカのように並んでおり、それで何人もの新米ハンターを噛み千切り、喰らってきたのだと考えると　胸が詰まるような思いがした。

そうなってたまるかよ！

畜生、と小さく口の中で呟き、意を決して背中に手を伸ばし、冷え切った長く重い骨を手取る。

ただでかい骨を研いだだけのような物だが、俺にとっては頼れる大剣だった。

俺は半ば自分を奮い立てるために叫んだ。

「俺は・・・ハンターなんだ!!」

ハンター。モンスターを狩り、人々の暮らしを守る　自然に対しての兵士だ。

俺はまだ新米で　情けないがヤツを前にして震えている。

だが、俺はハンター。

新米だとしても決して引いたりしては、いけない。

ただ、勝つことを信じて　柄を握りなおし、真っ直ぐドスギアノスに向かって走っていく!

するとヤツは身を低くする動作をして、赤い口の奥から白い液体と固体の混じったような物を吐き出してきた。

「ぶなっ」

間一髪、何となく本能的に避け、間合いを詰めながら重い大剣を上 に振り上げる!

ヤツは口をモゴモゴと動かしていたためか、俺の大剣にはついてこれず見事に腕から足にかけて一文字に切り裂く!

「キエエアア!!」

妙な奇声を発しフ拉里とよるめいたヤツを見て、俺は心の中で小さくガッツポーズをしたが

「クエエアア!!」

ヤツは大剣を振り終わってばかりの俺に向かって鋭い爪を突き出したきた!

ズシュ　と、鈍く小さい音が俺の頭をかすめる。

俺の肩から冷たさと暑さが同時に入り混じって　次の瞬間、脳内を電撃が走るような痛みを感じた。

が、そんなことお構い無しに、俺の腕は勝手に動いていた。

隙だらけの顎に向かって再び第二波をおくらん、と。

素早く、力強く、円を描くように大剣が上に持ち上がり　ヤツのもっとも目に当たらない部分を斬る。

すると、白い鱗が飛び散り、雪のように舞い雪に落ちていった。

そして、続いてまだ生暖かい真つ赤な血が雪を溶かした。
ヤツは力なくよろめき、数歩下がっていった。

手ごたえ、あり。

今度は突きをお見舞いしてやろうと柄を握りなおす が

ヤツは猛ダツシユで俺に背を向け逃げ出した。

鳥竜種というが、こいつは嘴があるだけで飛べない竜なのだ。

とはいえ、逃げるときの走りは素早く、見逃してしまうこともよくあるという。

俺は慌てて血のついた大剣を背中に戻し、ダツシユでそのあとを追った。

（大剣は重過ぎるため持ったままでは走れないのだ）

ヤツは雪の上をまるで固い地面を踏んでいるかのように軽やかに走る。

俺より重いのに、と思いながらザブザブと荒々しく雪を踏み分けて走った。

そんな逃走劇は数分ほど続き、開けた雪山の中腹に来たところ。

ヤツは急に動きを止め、俺の方に振り向いた。

そして、ヤツは首を上に向け 白い狩猟者の声が冷たい空気を通り抜ける。

それが止む前に、考える前に、俺は走りこんでいた。

ヤツは、それを見ると声を上げるのを止め、体を低くする。

次の瞬間、ヤツの足元の雪がパツと散り、ヤツの体が宙へと飛び上がった。

鋭い爪と牙を鈍く光らせて俺に飛び掛ってきたのだ！

が、俺は素早く大剣を背中から取り出すと同時にそれに合わせてカウンターのように踏み込み、斬りを喰らわせる！

俺は足を踏ん張って歯を食いしばり、首から腹にかけて一気に切り裂く！

「ギエエアア！！」

断末魔を思わされるような奇声を発し、ヤツは数メートル先に飛んでいった。

その雪が広く赤く染まり　ヤツはその上でピクピクと痙攣するのみだった。

肩で息をしながら俺は走り寄り、黄土色の目を覗き込んだ。

光がなく、瞬きもしてない。

しばらく呆然と見下ろしていたが　ふいに大声で叫びたい衝動に駆られた。

勝ったのだ。

始めて　ボスモンスターを狩ったのだ。

気がつくと俺は暗い雲の下で大きくガッツポーズをした。

これが俺、レイド・ウォーカーの初めてのボス狩りで、狩人としての第一歩であり

奴らとの出会いのきっかけだった。

エピローグ（後書き）

モンスターハンターをやっている人でないと、武器、モンスター等のイメージが掴みにくいと思いますが、もし理解していただけたら幸いです（・・）

これから更になんばっていききたいと思いますので、もしよかったら次も読んで下さい。

最後に、駄文をここまで読んで頂きありがとうございます！もしよかったら気軽に感想等書いてください。

1) 悪い話だと思ったら急いでムーンウォーク

一面白の、零下の世界。

その中でも、確かな人々の温かい営みがある。

それが俺の故郷である。

そして今、俺はそこに一仕事終えて帰ってきたところだ。

「村長！ 狩ってきたぜ！！」

俺は焚き火に当たっているばあさん　村長に大声をかける。

村長はいつもそこに座っており、半分眠りかけで火をたき続けているはずだが、今回は違っていた。

村長の前には見たことのないハンターがいたのだ。

その女　俺と同じかそれ以下に見えるので少女といった方がいいかもしれない　は、上から下までなかなかよさそうな赤い防具でそろえていた。

強い防具を持つ、ということはそいつが強いハンターであるということだ。

こんな辺境の地の村にそんなハンターがくるのは驚いた。

だが、それ以上に驚いたのは村長との話の内容だった。

村長とその少女は俺の来たことを無視して、真剣に話し合っていた。「・・・まあすこしこの山の状態を知りたいので・・・なにか依頼をくれないですか？」

少女は腕組みをしたままの状態で村長にむかって尋ねた。

すると、村長は間をおかずに言う。

「雪山をなめてはイカンぞ。よそ者だけが行ってはかなり危ないじやろう」

少女は腕組みを解き手振りをいれながら聞いた。

「ならばどうすればよいのですか？・・・この村にはハンターがいないのでしょうか？」

すると村長は　始めて俺のほうを向いた。

少女もつられて俺の方をむいた。意志の強そうな深い湖の色の瞳が俺を真っ直ぐ見貫く。

そんな中村長はシワだらけの口を静かに開いた。

「レイド、こいつがハンターじゃ」

俺と少女は驚いて同時に村長を見る。

少女は半ば冗談じゃないという目で村長に訴えていたが

「そいつはつい最近ハンターになったばかりじゃが・・・筋はいいし、よく雪山のことを知っておる」

筋がいい　そういわれて俺は胸から熱いものがこみあげてきた。だが、少女はそれに水を刺すように村長に食って掛かった。

「・・・一人でなになら狩れる？」

村長は小さく首を振るとぼつりと呟いた。

「残念じゃが、ドスギアノスくらいじゃ」

それも、たった今。

少女は話にならないとでも言いたげにため息をつくと、呆れ半分の声で言う。

「・・・ハンターなりたてですか」

「ふむ、多少足手まといになるが・・・かならずいつか役に立つじやろう」

文章的にすこしおかしいが　村長はそうハッキリと言い切った。シワだらけの顔に埋め込まれた黒い目が少女を見る。

しばらくの間そうしていたが

「・・・まあいいわ」

・・・いいのですかよ!?

それには俺がビクリした。

少女はそれを見逃さず、

「・・・なに？嫌だったら嫌でやめれば？こっちも新米さんなんて嫌だし」

俺は慌てて首を振る。

「ちげーよ!」

「怖い・・・んだったらやめなよ？」

少し控えめに少女は呟いた。

だが、それに強がり返そうとした時、

「それでは二人に依頼をやろう。最近雪山を徘徊しておるフルフルを狩るんじゃ」

「『フルフル！？』」

フルフル 洞窟に住んでいる白い盲目の飛竜種だ。

電撃を体内で作ることが出来る唯一のモンスターで、その臓器は武器に重宝されるという。

それを狙うハンターが多いが、それはあくまで玄人のすることだ。

当然、ドスギアノスなど屁でもなく、素人には 無謀だ。

「ふむ、まあ二人なら大丈夫じゃ。幸いやつは弱っておるしの。契約金は・・・まあ特別にいらんよ」

村長は勝手に話を進めていく。

わずかに楽しそうに目を伏せながら。

俺と少女はただ呆然としていたが 火がパチツとはじける音で我に返り、堰を切ったようにまくしあげた。

「ちょ・・・待った！！」

「ちょ・・・待ってよ！！」

『「なんでこんなやつと ！？」』

よりによって、フルフルを狩らなくちゃ駄目なんだ！？

□□□□□□□□□□

俺と少女はザクザクと雪山にむかって歩いていった。

パーティを組むのは初めてだが、命の取り合いの中、仲間との協力は大切だと思う。

時にお互いを励ましあい、お互いを庇い合う・・・だが、協調性一

つで全てが裏返しとなる。

相手の集中を奪い、攻撃の邪魔となる　最悪、お互いを斬りつけあってしまう。

そんなことが起こらないためにも　仲良くなり信用させるのは大切だった。

「え・・・つと名前は？俺はレイド。レイド・ウォーカーだ」

危なかった。危つく『人に名前を聞くときは自分から言え』と言われるところだった。

だが、なんとか自然にごまかせた・・・。

そう思いつつ、俺は横にいる少女に手を伸ばす。

「・・・ミナよ」

そうこちらを見ずに一言いっただけで少女　ミナはハンマーで肩を叩いた。

ハンマー　主に振り回して使う武器で、大剣と同じようなものだ。切り裂くことはできないが、その打撃は飛竜の足の骨すら砕く。

そして、意外と軽いため大剣と違って身軽に動ける。ただし、ガードはできない。

「そのハンマーは・・・なんだ？」

すると、ミナはえつというような顔でこちらを振り向いた。

微妙に誇らしげに、嬉しそうな声で言った。

「アイアンストライクよ。なかなかいいでしょ？」

アイアンストライク　俺が数個しか持っていない希少な鉱石、マカライト鉱石を多く使うハンマーだ！

「・・・すげえな」

俺はそうポツリと素直に感想を漏らすと、彼女は顔を微妙にそらした。

「ま・まあ・・・こんなもんよ」

口調は変わってない（つもりらしい）が、斜め横から見える口元は緩みまくっている。

・・・どうやら嬉しいらしい。

ちょうどその時黄色いキャンプ小屋、ベースキャンプが見えた。
ここを拠点として狩りし、休んだり、態勢を立て直すものだ。

「着いたぜ」

言わなくても分かるわよ、とても言いたそうに彼女は肩をすくめた。
俺は輝く銀色の山を背後に、それを見てうなづくと小さく呟いた。

「フルフル・・・飛竜か」

今回初めて飛竜と戦うが　しりごみはしてられない。
なぜなら

「ほら、行くわよ」

「わかってるって！」

俺は慌ててミナを追った。

ここはまだ雪が少ないが山では相変わらず冷たい。
だが、それでも俺らは氷のなかへと進んでいく。

□□□□□□□□□□

集団の時の利点は協力できることだ。

ならば、一人のときの利点はなんだ？

そしてもし　集団の時に協力できないのならば、どうなる？

・・・こうなった。

俺はスカスカのアイテムポーチをのぞきこむ。

『応急薬3個』

『地図』

『携帯砥石（刃物を研ぐ石）2個』

これはハンター協会から依頼を受けるときにもらえる支給品・・・
の一部だ。

俺の隣でアイテムポーチをポンポンと叩く少女に、ほとんどを先にとられてしまったのだ。

ちなみにその中身は、

『応急薬9個』

『地図』

『携帯砥石2個』

『携帯食料6個』

想像して欲しい。

命がけの戦場で薬や砥石は僅か、自分が持参した物でまかなうしかない。

鳴る腹を抱え、笑顔で食料をむさぼる少女を横目で睨む……。

辛すぎる。

だが取られた物は仕方ない。

アイテムポーチを探り持参した食料、こんがり肉に食らいつく。

渡る世の中、所詮、鬼まみれ。

そう思いながら雪を踏みしめ、標的　フルフルのいるところへと向かう。

□□□□□□□□□□

「あそこが　洞窟だ」

俺はそういつてぽっかりと開いた空洞をさす。

冷たい風が指先に触れ、痛みのような寒さがそこを通じて全身にまわった。

やや後ろを進んでいたミナはぼつりと、不機嫌そうに

「言わなくても分かるわよ」

と本日二度目のセリフを呟いた。

いつの間にかハンマーを背中に戻し、空になった手を開いたり閉じたりしていた。

そんなミナの姿に、俺は前を向き直して小さく苦笑いをした。

だが、その時俺の視界に何か動くものを捕らえる！

「！！！」

俺はミナの方に振り向いた。

ミナも気づいたらしく無言でうなづくと近くの物陰に隠れた。

その瞬間、向こうから甲高い声が響いた。

そして続いて白い姿がいくつも現れるのを見て　俺は安堵した。

ギアノスだ。群れで生活し、白い姿は雪にまぎれ獲物を狩るのに向いている。

注意しなくてはならないのは、その群れで襲ってくることで、特に難しい相手でない。

「どうする？」

俺は背中に手を伸ばしながら振り向いて、ミナに聞いた。

「言わなくても分かっただけ……るわよっ」

俺の目の前を巨大な物がかすめ　次の瞬間、俺の顔に紅い血が吹っかけられた。

一瞬なにがどうなったか分からなかったが　数メートル先に飛んでいた、頭のつぶれたギアノスを見て理解した。

どうやら俺が気づかないうちに俺の背後にギアノスが忍び寄っていたらしい。

それを倒してくれた　らしい。

俺はそれを理解し、お礼を言おうと口を開きかけたが　それはやつらの甲高い声によってさえぎられた。

「いくわよ！」

ミナは大きくハンマーを振りかぶりながら近くにいたギアノスへと駆け込む！

振り落とされたハンマーは始めに倒した一体目同様、頭を粉碎した！俺も負けじと手ごろな一体に向かって大剣をうならす！

ギアと、肺から息が漏れたような悲鳴をあげそいつは硬い雪にめり込み、そのまま絶命した。

そして、続いて襲い掛かってくる二匹のギアノスに、左から右に向

かつてなぎ払った！

相手は飛びかかってきたため、俺の剣をまともに喰らい数メートル先に吹っ飛んで行った。

一匹は壁に激突し、そのままピクリとも動かなくなったが、もう一匹は打ち所がよかつたらしくすぐに起き上がった。

俺は甲高く鳴く最後の一匹に向かって近づく。

が、それよりも早くミナが騒ぎ立てる一体の胴にハンマーをなぎ払っていた。

「・・・終わり、ね」

僅かに息を荒くしながら近くの岩に腰掛ける。

なんだか少し気分が悪そうだ。雪山にやられたのかもしれない。

そう心配する俺の心を知ってか知らずかミナは大きく息を吐いた。

「・・・はぁ・・・どうしょ・・・」

「ど、どうかしたのか!？」

「・・・」

俺の問いに答えようか考えているのか・・・ミナは俺の方をうかがっていた。

そして再び大きく息を吐くと　意を決したらしく俺から微妙に目をそらしながら言った。

「私・・・新米なの・・・」

一瞬、頭の中が真っ白になった。まるでこの雪世界のように。だがミナはお構い無しに続ける。

「・・・一人で狩れるのはせいぜいヤンクック程度・・・フルフルなんてとんでもないわ」

「え・・・でもその防具とか・・・」

硬そうな紅い防具　それはあきらかに強いモンスターを倒した証拠だった。

「これは・・・一緒に狩ったの強い人と」

悲しそうに翡翠色の目を伏せる。

「でも、いつも足手まとい・・・だから一人でこちらに来たの」

長い睫毛で彼女の瞳は見えないが　悲しそうな気持ちはよく伝わっていた。

認められないという不安、認めて欲しいと言う願い。

「・・・ミナ」

俺にはかける言葉が見つからなかった。

始めての人にこんなことを言うなんてよほど恐ろしいのかも知れない。

小さな肩は僅かに震えている。

俺はそれを見てただ困惑するばかりだった。

怒ればいいのだろうか？

気休めでも言えればいいのだろうか？

これは、俺にも当てはまる言葉で、だからこそなんといえればいいのか分からなかった。

だが　永遠とも思える時間は最悪なパターンで終わった。

1) 悪い話だと思ったら急いでムーンウォーク(後書き)

ここまで読んで頂きありがとうございます！

フルフル編いかがでしたか？文章力がないので分かりにくかったと思いますが・・・。

それはさておき、コメディがない・・・と思ってしまっ第一話。まあ、バトルにコメディを求めるのは難しいですがこれから(具体的には4話ぐらい)コメディを増やすつもりです(・・)

2) Oh!すごいヤなタイミングー!

最悪なパターンで永遠とも思えた時間が崩れた。

俺もミナもただ呆然としているようにうなだれていた。
だが 次の瞬間、その意識が急速に覚醒した。

頭上からの影が足元をさえぎるのが見えたのだ!

「『!』!」

俺とミナは同時に空を見上げた。

そこには 淀んだ灰色の空の下を不気味な白い飛竜が飛んでいたのだ!

「ここに降りてくる!!」

俺は叫びながらその場から離れようとする。

するとミナが手招きをするのが見え、さきほどミナが腰掛けていた岩に隠れた。

「あいつが・・・フルフルね」

ミナは僅かに赤い目を上に上げながら呟いた。

「ああ・・・」

白い、盲目、不気味、吸盤のような尻尾、ブヨブヨした皮、飛竜。間違いなく、フルフルだ。

隣にいるミナは震えていてそのたびに肩が触れる。

「ミナ」

声をかけようとしたが耳障りな咆哮によって再びさえぎられた。

『ヴオオオオン!!』

俺とミナは慌てて耳を塞ぐ。が、軽い頭痛がし、目まいをおこした。その中で俺は見た!

うげ。

フルフル 小さな翼で空を舞う姿も不気味だが、顔はもっとおぞましいものだった。

いや、正確に言うと顔がない。

丸まった首の先に真っ赤な口とそこに不ぞろいな長さの牙があるだけだ。

その口には奥行きがなく人間の口に近い形をしているのだが、それがより一層不気味さをかもし出している。

咆哮がようやく終わったと同時にやつは岩の方へとゆっくり歩いてきた。

目がないため俺らに気づいているのかも分からない。

もつとも、たとえ今気づかれてないとしてもいずれ見つかってしまうだろうが。

俺はそう思い大剣に手を伸ばすが　柔らかい手に触れた。

「・・・戦うの？」

恐怖に濁った翡翠色の目が真っ直ぐ俺を見抜き、思わずびくつとしたが

「あんたも怖がつてるじゃない」

そこで始めて自分が震えていることに気づいた。

恐らく、ミナ以上に。

だが、俺は自分に言い聞かせるように言い切った。

「やるよ・・・俺はハンターなんだから」

俺は真っ直ぐにミナの目を見つめ返して、フルフルへと向き直りながら大剣を抜いた。

フルフルはこっち側を向いている　まるで待っていたと言わんばかりに。

「うわあああああー！」

自分を奮い立たせるために叫びながら、そいつに向かって一直線に向かつて駆けていく！

フルフルは奇妙な一声をあげると俺に向かって首を伸ばし噛み付こうとする！

そしてそれは、ヤツの間合いに入っておらず喰らわないはずだったが

あれ？首・・・長くなつてない？

フルフルは先程の二倍近い首の長さに伸び、そのまま俺に噛み付いてきたのだ！

俺はとっさに大剣を前に差し出し、盾のような形でそれを防ぐ！
ギインと金属がぶつかり合うような音がして、俺はその衝撃に数歩後ろに退いた。

じん、と腕がしびれ僅かに動きが硬直した　その時をフルフルは見逃さなかった！

フルフルは腹がつくほど体勢を低くすると俺に向かってジャンプしてきたのだ！

当然、ドスギアノスの飛びかかりなどと違い　よけれなかったら
圧死してしまうものだった。

「ぶなっ」

俺は横にすつころんで逃げる！

だが　最悪なことに剣をその下においてきてしまったのだ！
当然、剣が折れたりすることはないだろうが　この戦場で武器を失うことは危険すぎた。

取りにいかなくてはならない　だがフルフルの足元にあるので行くことはできない。

俺は剣を睨んでいたが

「うわあああああ！！」

岩から小さな影　ミナが飛び出し、ハンマーを振りおろした！
いきなりの攻撃にフルフルは驚き、耳障りな悲鳴を上げながらよろめく。

だがミナは流れるような連続攻撃で右翼にもう一度ハンマーを叩きおろした！

それをまともに喰らい　フルフルは後ろに飛びのき、威嚇のように頭を下げている。

その口からは蒼い息が吹き出していた。

「早く！大剣を！」

ミナのその声で俺は我に帰り、慌てて雪のくぼみに埋め込まれた大剣に駆け寄った。

そして剣を握ったのと同時に　フルフルの体の内側が青白く輝くのを俺は見た。

発電をするつもりだ！あれに喰らうと最悪、体の内側から焼かれることとなる。

その近くにはハンマーを振りおろそうとしていたミナがいる。

俺は声を上げるまもなく　フルフルの体から青白い電光が放たれた！

ミナはそれをまともに喰らい、ばね人形のように数メートル跳ね飛んでいった。

「ミナ！」

俺は慌てて駆け寄ろうとしたが

苦しそうに顔をひきつらせながら、ミナがこちらをみていた。

救いを求めるのではない、ハンターの顔　自分にかまうな、というまなざしで。

意識があるのなら大丈夫、それになによりフルフルを倒さなくてはならない。

そう思いながらフルフルへと向きなおす。

よく見ると体や顔に大きなみみずばれのような古傷が浮かび上がっている。

右翼のミナが先程攻撃した所は、僅かに変形し、変色もしている。

それらを見ながら俺は柄を握りなおし、フルフルへと駆けていった！

ヤツはこちらに首を持ち上げて見たが　素早く股下に駆け込み、

ぞぶ、と右足へ剣を切りつける！

ブヨブヨした皮で一瞬押し戻されるのを感じたが、歯を食いしばり脚を一步踏み出した！

耳障りな悲鳴が鳴るがかまわず更に深く食い込ませる！

半分ほど切り込んだとき、小さな翼を羽ばたかせて、ヤツは空へと飛び上がった。

逃げる気だ！

逃がしてはいけない。回復させては 俺はなんとかそれを阻止しようとして石を投げつける。

が、石を投げても対して変わらず俺は悔しそうに見上げるだけだったが

ふいに、フルフルから爆音が聞こえた。

火薬の臭いがして木が飛び散るのが同時に見えると同時に、巨体が大きく傾く！

なんと フルフルの真下には先程までこっちで倒れていたはずのミナがおり、『打ち上げタル爆弾』 空へと飛んでいく爆弾を使って見事に命中させたのだ。

しかし、その時は特に気にもせず、ただ落ちたところへと駆けていった。

ミナも太刀を構えフルフルを迎え撃つ準備をしている。

フルフルは悲鳴のような声を上げ、地面に激突し、雪の塊が四散した！

そこに駆け寄った俺とミナは雪に構わず、目を細めながらも両側から剣をめちやくちゃに振り回す！

これはまさしくリンチだった。

気づくと フルフルは動かなくなっていた。

俺は肩で息をしながらミナに声をかけた。

「・・・ぜえ・・・か、狩ったな」

「はあ・・・ええ・・・」

意外と傷の少ない死体を見下ろす。

体は擦り傷程度の傷だが、首と脚にに大きな傷があり、それが致命傷となったのだろう。

まあ・・・なんにせよ、勝ったのだ。

『「やっつったああああ！！」』

その日の雪山では不快で耳障りな咆哮は響かず
新米ハンター二
人の喜びの雄たけびが聞こえた。

□□□□□□□□□□

白い空が赤びていく。

これから、生命を脅かす寒さの時間に入ろうとしている　そんな
夕暮れにようやく俺らは帰ってきた。

村のあちこちの家では灯りがともり始め、のどかな食卓を囲んでい
るのが見えた。

そういえば、腹減ったな・・・

そう思いながら、火に当たっている村長の方へと歩いていった。

「おかえり、レイド、ミナ」

村長の方から先に優しく声をかけてきてくれた。

思いがけないことで、ただ果然と口を半開きにしていたのだが

俺は少し照れくさそうに小さな声で呟いた。

「・・・ただいま」

ミナは少したじろいでいたが、やがて小さく口ごもるようにただい
ま、といった。

そんな二人を見て村長は嬉しそうに微笑んだ。

「フルフル・・・おつかれ様だったねえ」

俺は小さく息を吐くとああ、といった。

「まあ、ゆつくりお休み。ミナも・・・明日、町に戻るんだろう？」
俺は、驚いてミナの方を見た。

いや、当然のことなんだが、俺は自分でも驚くほどショックを
受けていたのだ。

そんな俺の心境を知ってか知らずかミナははっきりした口調で言っ

た。

「・・・はい」

「ふむ、まあそうじゃと思ったよ」

ミナは俺の視線に気づいたのか、小さく微笑んだ。

「そゆこと、レイド」

「私、明日・・・帰るから」

□□□□□□□□□□

その夜、俺はあまりよく眠れなかった。

いやに胸が高鳴り　そのくせ、俺の理性では複雑になにかが渦巻いていた。

カーテンは窓が開いているわけではないのにふわふわと揺れる。
そこからやたらと静かな空が見え、幻想的なオーラが今日も美しく
った。

だが、俺の心はそれをまったく捉えておらず俺の心だけが違う、
そんな違和感があった。

違和感の正体は分かっている。

それをどうするか　今悩んでいるのだ。

□□□□□□□□□□

空が白くなっていき、村に活力が満ちり始める。

朝特有の空気は冷たく午後に比べるとかなり寒い。

だが、そんな中　彼女、ミナは行ってしまうという。

俺は村の出口で遠目に、村長と話している金髪の少女を見てい

る。

寝不足なためか時々意識が遠くなったりするが、必死に目を開けていた。

そしてようやく、少女は一通り村長と話し終わったらしく、俺の方に近づいてきた。

「よお」

俺は片手を上げて挨拶をすると、ミナも手をあげて近づいてきた。実ににこやかな笑顔で。

「・・・初めての飛竜狩りで興奮して眠れなかったの？」
俺の目元をみてミナは言った。

「ちげえ・・・けどまあ、確かにそれもあるかもな・・・」

「じゃあ、なに？」

ミナはいじわるそうに笑っている。

俺は唇を尖らせて小さく呟くように言った。

「・・・あのさ、俺も連れて行ってくんない？」

「ええ？ごめん、聞こえなかったー」

しらじらしく、片手を耳に当てるポーズをとる。

「俺も連れて行ってください」

少し声を張り上げてそういった。

すると、少女は満足そうに微笑むと俺の前に手を差し伸ばした。

眠気も吹っ飛びそうな、はっとするような綺麗な微笑で。

「ミナ・サフィールよ。よろしく、レイド」

そして、俺はしばらく呆然としていたのだが　ふっと苦笑した。

「ああ・・・こちらこそ」

俺は差し出された小さな手を握った。

2) Oh!すごいヤなタイミング!! (後書き)

駄文ですがここまで読んで頂きありがとうございました!

フルフルを倒す話でしたが、いかがでしたか?

このモンスターは特に表現が難しかったです。まあ、どれも変わりなくダメですが・・・。

それはさておき、一話が長すぎるのではないかと思ったので、これから一話3000文字を目安にしていきたいと思います! どうでもいい

では、最後にここまで駄目なあとがきすら読んでくださった人・・・
本当にありがとうございました!

3) 酒場の水差しと美形兄妹

「すげえ・・・これが町・・・!？」

雪山近くの村の唯一のハンター・・・だった俺、レイドは産まれて初めて町に来た。

そう、驚いて辺りをキョロキョロしていると　不意に後頭部を殴られた。

「きよろきよろしないでよ、恥ずかしい！」

比較的小声で金髪の少女、ミナは怒鳴った。

つい先日、フルフルを協力して倒した・・・のだが、あまりその話題は出てこない。

なんせ、ミナも俺も震えていたし理性捨てて叫んだり、弱音を吐いたりしてしまっただからだ。

それはさておき、こいつとの出会いのおかげでこの町にいるわけなのだった。

だから、一応こいつに従わなくてはならない。

「すみません・・・」

郷に入っては郷に従え。

俺はそう思いつつ視線を下に落とす。

すると、ミナは分かればよろしい、とでも言わんばかりに体の前で手を組む。

俺と同じくらいの強さで、年下のクセに・・・

ハンターは腕が物を言う職業だから、歳は関係ないのだが、それにしたって少しぐらいは・・・。

そう思いつつ、ミナの一步後ろをついて歩いていった。

「で、ミナ、これからどうすればいいんだ？」

俺はふと思いつきそう聞いた。

「とりあえず・・・ハンター登録ね。そうしないと協会から依頼とか援助がこないのよ」

俺は、雪山村の専属・・・まあ地方ハンターだったためにそういった正式な登録はしたことがなかった。

ハンター協会所属になると、依頼によつては各地方を回ることができたり、回復薬などが安く買えたり・・・と色々いい事があるそう
だ。

「・・・まあ町を案内しがてら、行くわよ・・・でもあまりキョロキョロしない！」

「へーい」

俺はやる気のなさそうな返事をして、足はやに進むミナを追った。

□□□□□□□□□□

きらきらと光る大理石の噴水が目印の広場。

このあたりが町の中心部であり、ハンターたちの住まいの入り口らしい。

その証拠として白い標識にでかかと『ハンター通り』とかいてあるからだ。

また、先程からハンターの姿がちらほら見えるようになってきて、中には、依頼を終わったばかりといった疲労感漂うハンターもいた。そんな中、俺はあることに気がついた。

「・・・なあ、さつきからえらく視線を感じるんですけど・・・」
いくら鈍感な奴でも分かるくらい明らかにこつちに視線が配られているのだ。気にしない方がおかしい。

一瞬こつちを見るだけの奴もいるが、じつと執拗に見てくる奴もあり
気のせいか嫉妬のような視線も感じ取られた。

「ま、気にしないで。きつとやつらヒースさん狙いよ」

「ヒース？」

「そ・・・前に話したパーティの仲間」

少しボリュームを落として話したミナを見て俺はハツとした。

そうだ。そういえば・・・

「あ、あのさ・・・そのヒースって人に会いに行くの？」

俺は、ミナとパーティを組む・・・と思われるのだが、だとしたら協会でハンター、パーティ登録の前にヒースさんに会わなくてはならない。

だが、ミナはきつと会いづらだろう。

町に向かう途中聞いた話では、ヒースさんと他二名とで強い飛竜を狩りに行くはずだったが、ミナは足手まといになってしまふことを感じ、一人だけこっそり抜けてきたのだ。

何も言わず 置手紙に雪山に行くだけ書いて。

「・・・ええ」

ミナはいくらか声を上げていった。

そして俺の方を振り向くと切り替わって、明るく笑った。

「はっ。何心配してんのよ！大丈夫よ、大丈夫！そんなことより、ハンター試験の心配しなよ？」

その笑顔にしばらく安心してしまったのだが、慌てて首を振る。

「ちげえよ！んなわけねえ・・・って今後半なんて言った？」

「ハンター試験」

明らかに短くなった後半のセリフを聞き、俺は驚いた。

「あんのか、やっぱり！？」

「やっぱりあるのよねえー」

俺の反応を見てくすくすと笑いながらミナは意地悪そうにいった。

「一人で・・・大怪鳥、イャンクックを倒すなんて、余裕よねえ」

怪鳥イャンクック ピンクの甲羅に覆われた体に、意外と調和する蒼い翼、愛嬌のある顔にはエリマキのような大きな耳と頭のほとんどを守りつくす大きな嘴。

その外見はまさしく怪鳥の名に相応しいだろう。

フルフルよりは弱いのだが、それでも俺にとっては油断できない相手だ。

「余裕じゃねえけど！倒せっさ！」

俺は胸をはってそいいきった。

すると、ミナは満足そうに微笑みながらうなづいた。

「狩りに絶対はないしね。いいんじゃない、その意気で」

余裕だと言ったくせに、と思ったが、どうせ無視されるのでそれは飲み込んだ。

それと同時に、後ろから声かけられた。

「あつ、ミナ？」

素早く後ろを振り向くと、片手に買い物袋、幼い顔には似合わない大きなランス、でも普段着というアンバランス女の子が立っていた。

「・・・！ロシア！」

ミナは驚いてそういった。

ロシアと呼ばれた少女は 大体ミナより一つか二つほど上で俺とほぼ同じ年らしい。

ストレートで鮮やかな紫色の髪は上で結わえられており、目は澄んだ青空のようだ。

まるで、完璧な美少女のように見えたのだが

「ミナはどうしたんすか？」

この子、口調が『・・・っす』だ！！

俺は驚いて、目を大きく見開くが、ミナは慣れているといわんばかりの平常心だ。

「ロシアは・・・お買い物？」

「まあ、お使いつすねえ。・・・じゃなくて、心配したんすよう」

この言葉には俺もミナも首をかしげた。

なんのことだか分からなかったのだが

「いや、ミナ一人で雪山行ってしまったんじゃないすか。そしたら兄貴もヒースも追いかけるって言ってきたなくて・・・まあ、なんとかクエストに行ったんすけどね」

ロシアは柔らかく微笑み、ミナに言った。

「おかえりっす、ミナ。行こ、兄貴もヒースも・・・心配してるっ

す」

「うん！」

「ちょうど酒場にいるんすよ。いこうつす」

すっかり迷いごとが吹っ切れたような顔をしてミナはロシアのあとをついていく。

・・・俺のことはすっかりスルーされた。

□□□□□□□□□□

酒場 それはハンターたちが集い、自分の武勇伝を語り、そして新たにそれを作り出すために依頼を受ける場所。

まだお昼前だというのにハンターたちの集う酒場はお酒や料理のにおいが充満していた。

騒ぐ声もまるで祭りの日の夜のようなだ。

そんな中、俺とミナはロシアについてさらに酒場の奥へと向かっていった。

そして 店の奥、カウンターの一番近くにその人はいた。

髪の色は紫っぽい藍色であるからおそらく、ロシアの兄だろう。だが

・・・シェフの格好をしている。

一瞬店の人かと思ったのだが、それがフルフルの皮でできている防具であった。

更に、机には具の入った大きなフライパンがある。

フライパン、というが厚みがあり、熱は通さないほどだ。

また、それにはコゲ跡はなく、赤黒いものがところどころに付着している。

さらに言うと、中に入っている麺類は 作り物で食べられない。

なぜなら、これはハンマーだからだ。

でもパツと見、変人。

それが俺の第一印象だった。

「兄貴！ミナちゃん帰ってきたっすよ！」

ラシアは店内の騒ぎに飲み込まれないよう、大きな声で叫んだ。

「ミナ・・・か？」

ラシアの兄は威厳の有る低声音で聞き返した。

顔はどんな薬でも治せそうにない、不機嫌そうな顔で、美形であるが、かなり近寄りがたいオーラが出ている。

「・・・と、誰だ貴様」

威圧感のある藍色がかった灰色の目が俺を睨む。

「・・・そういえば、誰っすか？ミナの知り合いっすか？」

鮮やかな紫色の目が俺を見つめる。

兄妹の視線が痛くなり、下をうつむく。

酒場の床には掃除をしてもふき取れていない、汚れが目立っていた。

「こいつはレイドよ。・・・話せば長くなるけど」

隣にいるミナがはつきりとした声でそう言い切った。

「ふーん。そうっすかあ」

「ふん・・・なにがあった？」

ラシアの兄は組んでいた足を解き、代わりに長く細い指を組んだ。

威圧感のある目で見抜かれたが、ミナは臆することなく、数日前受けたクエストのことを話し始めた。

「レイド君とフルフルを・・・」

ラシアは驚いたような口調でそう呟いた。

ラシアの兄も少なからずとも驚いたようだが、すぐに不機嫌そうな顔に戻った。

「まあね、そゆこと」

口早にそういうと、テーブルに置いてあった水差しをコップにつが

ないでそのまま飲んだ。

唇の端から滴が一滴、二滴と零れるが誰も気にしない。

ミナはそのまま一気に飲み干し、水差しを乱暴にテーブルに叩きつけた。

「・・・で、ヒースは？」

ミナは一息もつかずにロシアの兄に聞いた。
すると、ロシアの兄は小さく首を振った。

「奴はちよんど、ミナが戻ってくる数分前に酒場に居たんだが・・・
クエストを受けて出て行った」

「・・・入れ違いっすね」

ミナは肩を落として小さくそう、と呟き下をうつむいた。
おそらく、ヒースにフルフルを倒したことを自慢したかったのだろう。

それから数拍置いて、ロシアの兄がゆっくりとイスから腰を上げていった。

「・・・今から密林に行くか」

『「！？」』

俺とミナは同時に驚き、何言い出すんだという顔でロシアを見上げた。

しかし、ロシアは満面の笑顔で兄に賛成をする。

「そうっすね！今からだったら間に合うし、レイド君の腕を見るいい機会っすよね！」

「ええ！？」

俺は突如出された自分の名前に驚き、思わず体を震わした。
だが、誰も気づいていない。

唯一、気づきそうなミナは驚きのあまり、しばらく呆然としていたが

「え、いやいいわよ！」

「よし、じゃあ行こう」

「いや、待ってよ！そんな、私のためだけに・・・」

ミナは奥歯に物が詰まったような感じになり、ただ小さく口ごもる。すると、いつの間にか背後に回っていたロシアが俺とミナの肩に手を置いた。

「いいんすよ、レイド君の腕も見たいし、ちょうどいいって言ってるじゃないすか、ね」

そういつて、ロシアは軽くウインクをして見せた。

ミナはそれを見て、少し嬉しそうな顔をした。

「・・・じゃあ、お言葉に甘えて」

「レイド君も、いいすつよね？」

斜め下からロシアが綺麗な笑顔で覗き込んできた。

「・・・これはもう、いいといわざるをえないだろう。」

「い、いいですよッ」

僅かに舌を嚙んで返事をした俺にロシアは再び優しく微笑みかけた。

□□□□□□□□□□

その時はまだ知らない。

この返事を死ぬほど後悔することを

3) 酒場の水差しと美形兄妹(後書き)

ここまで読んで頂きありがとうございました！

タイトル通り、美形兄妹の登場です(・・・)でも、兄は変人という設定ですので・・・夢を持たないように(何言ってるの)

それはさておき、次回予告！

ついにパーティのボス(?)のヒースさん登場疑惑です!・・・すいません、疑惑です。予定です。

ここまで駄文な後書きを読んでもうださった方・・・ありがとうございます！

4) Look!!これが不幸の始まりさア!!

青い波が茶色い船体にぶつかっては、白く泡立ち、糸を引きながら消えていった。

ゆらり、ゆらりと一定のリズムで船が揺れる中、紫色の髪をした少女は俺に手を差し出してきた。

「改めてよろしくつす、レイド君!ロシア・エラドつす!」

彼女　ロシア・エラドは青空色の瞳で俺に優しく微笑みかける。
俺は、慌てて手を握りながら、口早に自己紹介をした。

「レイドだ、レイド・ウォーカー!。こちらこそよろしく、ロシア」
そう言っていると、軽く手に力をこめたぎゅつと握った。

ロシアはにっこりと微笑むと、静かに手を離し、そして先程から熱心に武器の手入れをしている美男の方をむいた。

「兄のヘルガつす。兄貴!」

そうロシアが呼ぶと、手を動かしながら威圧感のある低声音で兄ヘルガは答えた。

「ヘルガだ。まあ、敬語とかは気にしなくていい」

不機嫌そうにそうとだけ言っていると、再び口を閉じ、黙々と武器の手入れを再開した。

「すまんつすねえ。無愛想な兄で・・・」

ロシアは苦笑いしながらそういった。

俺も薄く苦笑いしながら、目前に迫った密林を見上げた。

崖があるので密林本体は見えないが、それでもかなり緑が生い茂っているのが分かる。

先程から、雨の前のような特有の森の香りが漂っている。

かなり、湿気が高いのだろう。だが、不快になるほどの暑さと湿気ではない。

動けば別だろうが　そう思いつつ、俺は船の先、ミナの方へと進んだ。

「そろそろ着きそうね。準備はいいの？」

「・・・ああ」

細い金の髪が太陽の光を浴びて白色に輝き、それがたなびいている。
「そ」

小さくそういうと、首を二、三回回した。

ゴキ、と乾いたいい音がした。

「・・・密林には来た事あんのか？」

「ま、当然来た事あるわよ」

俺は続きを促そうと、小さくそれで、と聞いた。

「弱い奴を狩ったの。初めてボスモンスターを倒したのはここで、飛竜を倒したのもここよ」

俺は、ふと前の会話を思い出した。

そういえば、密林には怪鳥イャンクックが生息しているのだ。

「もしかすると、ヒースさんはイャンクックに用があつたのかな？」

ミナは小さく肩をすくめると、奥のほうで船の舵を取っていたラシアに大声で聞いた。

「ヒースさんって何のようであつたのかな？」

するとラシアも負けず劣らずの声で言った。

「さあ。分からないすけど」

そういいきつたその時、船体がゴツン、と音を立てて止まった。

「・・・着いたみたいね」

そう言うか言い切る前か　ミナは波打ち際へと飛び降りた。

いつの間にか、一番後ろにいたラシアも、武器の手入れをしていたヘルガも船を下りていた。

そして、まるでレアモンスターの死体に向かっていくような勢いで、青い箱に向かっていく！

「・・・青い、箱？」

「あああああー!!」

叫んだときはすでに遅かった。

俺が箱の中を覗き込んだときには 破れかけた地図しかなかった。

青い鳥は幸せの鳥。

青い箱はきつと、パンドラの箱にちがいない。

雪山とは違い緑の多い密林では、足を雪に取られない代わりに、うつそうと茂った植物が俺たちの体にまとわりつく。

俺は慣れない緑の多さに困惑しつつも、新天地とも言える新しい狩場に胸が躍っていた。

背の高い木々、日陰にたたずむキノコ、不思議な色をした花……。俺は周りをキョロキョロと見回しては、木の枝にぶつかり、また回りを見回しては木の根に取られて盛大にすっころんだりした。そんなことを五回ほど繰り返したころだろうか。

正面の茂みの奥に草を食んでいる、恐竜のような生き物が見えた。アプトノス 灰色の小さな鱗に覆われている、三、四メートルほどの草食竜だ。

尻尾には棘があるが滅多に攻撃をしてこないため、食用としてよく狩られるそうだ。

目を凝らしてのんびり草を食んでいるアプトノスを見ている俺に気づいたミナが薄く笑いかけてきた。

「こんなので珍しがっていたら、この先が思いやられるわね」

俺ははつと我に帰り、唇を尖らしたが特に何も言おうとはしなかった。

初めてなので仕方ないのだが、注意力が散って危険を察知できなくては危ない、というミナの警告だったのだから。

「・・・行くぞ」

一番前から声がかけられ、俺たちはヘルガの後ろを追ってアプトノスのいる場を離れた。

しばらく行くと急な坂道に当たった。

ヘルガはそこで初めて後ろを振り向くと、威圧感のある声で言った。
「この坂を上りきると、洞窟の入り口だ。まずそこに向うのだが、そこにランポスがいる」

「・・・ランポス？」

そう言い切った後、俺は思わず聞いてしまったことに後悔した。

ヘルガが眉をひそめてこちらを睨んでいるのだ。飛竜に睨まれているような恐ろしさだ。

すると、みかねたラシアが笑顔で言った。

「そっちで言うギアノスの色違いのやつす。青い奴なんすよ」

そういえば、聞き覚えがある。

雪山のギアノス、砂漠のゲネポス、火山や沼地のイーオスは、元はランポス種であるという。

だから、そのなかで最もポピュラーなランポスを知らない、と言った俺はバカにしか映らなかったのだろう。

なんとなく、さきほど睨まれた理由が分かったのだが、それにしても、怖すぎだろう。

しかし、睨んできた当本人は再び前を向きなおし、勝手に坂を登っていった。

俺は小さく息を吐くと、その大きな背中を追った。

□□□□□□□□□□

周りは不快な、鳥のような鳴き声がこだまし、緑がゆれる。

鳥　というが、あれはランポスたちだ。しゃがれた声で仲間と今回の獲物を喜び合っている。

「ハア・・・は・・・ッ」

そんな中で、ハンター協会の情報員はただ走る。

情報員　ハンターたちが狩りをするために必要な情報を集める者

である。

植物の生息箇所から、大型モンスターの生息についてまで、ありとあらゆる情報を手に入れる。

すると当然、自分の身を守るためにもある程度モンスターを狩れる様にならなくてはならない。

しかし彼の武器、片手剣は根元からポツキリと折れているのだ。

もう片手の腕には盾もあるのだが、変形しまともな防御力は見込めそうにもない。

ゆえに、彼は走り逃げるのだ。

目は血走り、足はぬかるみにとられたのだろうか、随分とボロボロになって。

だが、今はとにかく走るしかない。

ランポスと、逃げ足が少しだけ速い人間　勝負は分かっている。先程出くわしたモンスターよりはかわいいもだし、なにより、自分を逃げさせてくれたハンターのためにも。

（早く・・・早く、ハンター協会に連絡を！）

彼はそう思いながら、無我夢中で走っていたが　ふいに、自分の数メートル先の茂みが二つに分かれ、二つの青い塊が自分に向かって飛び掛ってきた。

（ランポ　）

そう考えきる間もなく、黒いギラギラした爪が降りかかり　次の瞬間、肩と足に衝撃と共に暑さと寒さが入り混じった。

そして、一条の光も見えない緑のトンネルの中、叫び声が響いた。

4) Look!!これが不幸の始まりさア!! (後書き)

駄文を読んで頂き、ありがとうございました!

ヘルガ、ラシア加えての初めての狩り!ですが、原作を知っている方は『5』人パーティーになっちゃうじゃん?と思っている方もいらっしゃるでしょう。

そうです。でも、ご安心を(うぬぼれんなよバカ)

基本としては、レイドとミナの二人組パーティー(予定)にして、時々他のハンターが加わる・・・みたいな?

長くなってしまいそうなので、これで終わります。

ありがとうございました(・・)

次回・・・ヒース、大型モンスター登場疑惑!! (自信ないのかよ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0604c/>

Yes!モンスターハンター!!

2010年10月14日12時03分発行